木津川・尻無川舟運シナリオ

大　正　区　ま　ち　案　内　人　協　会

（H22.9.18　実施）

案内場所等の一覧

1. 大正区の概要　(1)
2. 三軒家西の御船蔵　(25)
3. 尻無川　(26)
4. 尻無川水門　(24)
5. 千歳橋　(20)
6. 貯木場　(21)
7. 大正内港　(27)
8. GM工場の跡　(29)
9. 千本松大橋　(12)
10. 千本松渡船場　(13)
11. 大阪俘虜収容所　(11)
12. 大正区の渡船場　(8)
13. 落合下渡船場　(10)
14. 落合上渡船場　(9)
15. 三軒家水門　(7)
16. 木津川水門　(6)
17. 木津川　(4)
18. 岩松橋　(28)

19. 三軒家地区を開墾した中村（木津）勘助　(2)
20. 東洋紡の前身、大阪紡績　(3)
21. 古典落語木津川の「骨つり」　(5)
22. 新木津川大橋　(14)
23. 旧木津川飛行場　(15)
24. 木津川渡船場　(16)
25. 鶴浜埋立地　(17)
26. イケア　(18)
27. なみはや大橋　(19)
28. 朝鮮通信使　(22)
29. 甚兵衛渡船場　(23)

1　大正区の概要

昭和７年１０月１日、港区から分離し、大正区が誕生。

「大正区」の名は「大正橋」から名付けられ、「大正橋」の名は、初代大正橋が大正 4 年に架けられたことから名付けられました（当時は西区）。

初代大正橋は、当時日本一の支間長(91,4m)を誇るアーチ橋だった。現在の大正橋は昭和 49 年に旧大正橋の下流に架け替えられた２代目。橋の南側（大正区側）の欄干を五線譜に見立てて、ベートーベン作曲の、交響曲第９番「歓喜の歌」の譜面が、歩道にはメトロノームの堰堤（えんてい）、路面にはピアノの鍵盤がデザインされています。

大正区は、市の南西部に位置して大阪湾に面し、区の三方を木津川、尻無川、岩崎運河に囲まれ、臨海工業地帯として発展してきました。区の周囲を水で囲まれたこのような行政区は、全国調べてもほとんどない非常に珍しいまちとなっています。

区の中央部には、区のシンボルである標高 33mの「昭和山」を中心とした千島公園(11ha)があり、区の花「つつじ」やサクラを始め、四季折々の花と緑に囲まれた憩いの場として子どもからおとしよりまで広く親しまれています。そのふもとには区総合庁舎・体育館・多目的グラウンド・コミュニティセンター・図書館などの公共施設が配置されています。

公園南側には、音楽ホール・スポーツセンター・温水プールなどを備えた複合施設「アゼリア大正」が、区民の健康増進と文化交流の拠点として利用されています。

区西部の北村地区には、総合医療施設、身体障害者・高齢者療護施設や知的障害者更生施設などの施設が展開され、医療・福祉ゾーンとして整備されています。また、高齢社会に向けた施設として「大正区ふれあい福祉センター」と３カ所の在宅サービスステーションも整い、在宅介護の支援に大きな役割を果たしています。

交通網は、地下鉄「長堀鶴見緑地線」が平成９年に「大正駅」まで延伸され、都心へのアクセスも充実しました。隣接区との連絡橋として「千本松大橋」「新木津川大橋」「なみはや大橋」、区内連絡橋として大正内港に架かる「千歳橋」などによりスムーズな交通の循環が図られている。さらに、市内８カ所のうち７カ所が当区にあり「動く橋」として区民に親しまれている渡船場は、近年では区外や市外から訪れる人々も多く、新たな観光資源として注目されています。

２　中村勘助（三軒家地区の開発者）

大正区史や西成郡史によれば慶長 15 年（1610 年）中村（木津）勘助が木津川尻の姫島に豊臣家の軍船係船所の建設に従事し、堤防を築いて新田を開発したので豊臣家より「勘助島」の名を与えられたとあります。延宝３年（1675 年）刊の大坂案内書である「蘆分船（あしわけぶね）」に言う「三軒屋」は勘助島のことである。家数の少なさから「三軒屋」と名付けられました。

明治 16 年７月、渋沢栄一や藤田伝三郎が出資した大阪紡績会社（通称三軒家紡績）が１万５百錘（すい）の機械を備え操業を開始しました。

３　大阪紡績（東洋紡の前身）

明治 16 年 7 月、渋沢栄一や藤田伝三郎が出資した大阪紡績会社（通称三軒家紡績）が 1 万5百錘（すい）の機械を備え操業を開始しました。

三軒家は江戸時代から船着場として賑わい、海上輸送の便利さから選ばれたといわれています。明治 19 年には発電機を購入し、民間で初めての電灯がともり、工場全体が不夜城のように浮かび上がりました。

また、大阪紡績を核として数多くの紡績繊維会社ができた明治 20 年代以後は「東洋のマンチェスター」として産業革命で有名な英国のマンチェスターと並び称されるほどの発展をとげました。

大正 3 年に四日市の三重紡績と合併して東洋紡績と改名、太平洋戦争の激化とともに軍需工場に転換させられ昭和20年 3 月の大空襲で消失しました。現在でも東洋紡績には明治 16 年開業当時の建物のレンガが保存されています。

4　木津川

土佐堀川から分派して南流し、西区千代崎の東岸沿いに大正橋に至り、大正区の東方を南下、南恩加島で西へ大きく曲がって大阪港に入る。延長 8,657m、面積 1,462,035 ㎡、平均幅員は昭和 27 年の調べで 169m、一級河川に指定されています。この川は古くから開け、豊臣家の軍船停泊所の建設、中村勘助の木津川浚渫（しゅんせつ）、江戸幕府の船番所、船囲い場など多くの史実に彩られています。江戸時代から明治初期にかけては、諸国の回船が多く集まり「木津川二十四浜」を賑わしました。うち大正区には、勘助島上ノ浜・中ノ浜・下ノ浜、三軒家浜、難波島浜などがあり、浜ごとに上荷船の所属が決まっていて、三軒家浜は10～15 隻、勘助島は三浜で 30 隻ほどを抱えていました。明治 20 年頃まで木津川への船の出入りは多かったが、その後水運の良い安治川に主導権を奪われた。大正元年の川筋の停泊数は、安治川の 2,221 隻が最も多く、木津川 1,336 隻、尻無川 620 隻となっています。

5　古典落語「骨釣り」

「骨（こつ）釣り」は古典落語の演題。大阪落語の一つで、東京落語の「野ざらし」の原話とも考えられるが、はっきりしていません。いずれにしても古い噺（はなし）で、埋もれて忘れられていたものを古老の桂右之助から聴き取り1970 年頃にが「野ざらし」を元に仕立て直しました。木津川と大川を舞台にした落語。

《あらすじ》

ある男が、ひいきにしてもらっている旦那に連れられて木津川へ魚釣りに行ったところ、髑髏を釣り上げてしまった。気味悪いので捨てようとしたが、旦那に諌（いさ）められて、寺に持って行って回向（えこう。＊供養すること。）したその夜、男の家に若い美しい女が訪ねて来る。実はその美女は髑髏（どくろ）で、回向してもらった礼に来たのであった。それを見ていたとなりの男が話を聞き、同じように大川へ行って髑髏を見つけ、大喜びで回向して、その晩、自分好みのいい女が来るのを胸をわくわくさせながら待っていると、現われたのはむくつけき大男。「京の三条川原で処刑されて大川に骸（むくろ）をさらし、やんぬるかなと嘆く折、ありがたや今日のご回向。お礼に閨中（けいちゅう）のお伽（とぎ）つかまつらん（＊床（とこ）を共にしよう、と言う意味）」と大音声に呼ばわるのでびっくりして、誰だと聞くと、石川

五右衛門と答える。「やっぱり釜に縁がある」、或いは「それ

で釜を割りに来たか」と言うのがオチ。

6　木津川水門

・昭和45年11月完成

・アーチ型水門（副水門スウィング・ゲート）

・ゲートの大きさ：主水門：幅66.7m×高さ11.9m、副水門：幅17.1m×高さ11.55m

・ゲート重量：主水門：530t、副水門：107t

・毎月1～2回、水門閉鎖の試運転を行っています。

7　三軒家水門

・　昭和43年7月完成

・走行式スルース・ゲート

・ゲートの大きさ：上段：幅16.24m×高さ5.70m、

下段：幅15.30m×高さ4.98m

・ゲート重量　　：上段：38.8ｔ、下段：44.6ｔ

・毎月1～2回、水門閉鎖の試運転を行っています。

東南海・南海地震の際に発生する津波は、大阪市内の川を逆流する可能性があると指摘されています。大正区の三軒家水門付近では、満潮時の水位が基準点プラス2.1mに設定されており、今後予想される東南海・南海地震が最大規模で発生した場合（地震発生から2時間後に大阪湾へ第1波が押し寄せます。シミュレーションでは高さ2.9mと推測されています。）の津波が満潮時に襲来しても高さはクリアできます。

一方で、津波の襲来に備え、公道鉄扉を閉鎖する水防団の強化や訓練に努めています。

8　大正区の渡船

周囲を水に囲まれた大正区は大正初期まで大部分がのどかな農村地帯でした。　陸路の交通機関の発達は遅く水路を行き来する小船と、木津川や尻無川の渡しが重要な交通機関でした。　水都大阪には多数の河川があり、人々の通行のための渡船は江戸時代から始まり渡船業は代々家業として受け継がれて来たが明治24年に府が「渡船営業規則」を定め監督、取締りを行なうようになりました。

明治40年に安治川、尻無川など29の渡船場を市営事業として市が管理することになりました。大正9年、旧道路法の施工により渡船は無料となり、それまでの請負制から昭和7年、市の直営方式に改められ現在に至っています。

昭和10年には31箇所あった渡船場が橋梁の架設や道路施設の整備に伴って次第に廃止され、特に昭和20年には戦災のためその多くが廃止されました。

昭和23年15箇所で再開されたが、その後都市整備が進み、自動車の利用増加によって12箇所となり、さらに利用者の減少により、大阪市内の渡船は現在ベイエリアを中心に8箇所となっています。内7箇所が大正区にあり（他の1箇所は天保山渡船：港区ー此花区）、自動車の利用が多くなった現在も生活の足になり、動く橋として利用するかたわら近代都市の風物詩となっています。

9　落合上渡船

大正区千島一丁目と西成区北津守四丁目を結んでいます。

岸壁間100m　1日40往復、平均利用者数は1日約680人。

大正区側は旧町名を「新炭屋町(しんすみやちょう)」と言い、宝暦13年（1763年）に大坂瓦町居住の炭屋三郎兵衛によって開発された「炭屋新田」のあったところです。

１０　落合下渡船

大正区平尾一丁目と西成区津守二丁目を結んでいます。岸壁間138m　１日30往復、平均利用者数は１日約450人。

このあたりは、毎年 10 月から翌年 4 月にかけて、数百羽のユリカモメが飛来してきます。

大正区側の「平尾(ひらお)」の町名は明和８年（1771 年）に開発された「平尾新田」に由来しています。

１１　大阪俘虜収容所（平尾１丁目・平尾亥開公園）

大阪俘虜（ふりょ）収容所は、大正区南恩加島の木津川に面した場所に、第１次世界大戦のドイツ軍捕虜が大正３年（1914年）11月21日760名が収容され、大正６年２月19日広島県似島（にのしま）へ移動するまでの２年数ヶ月間開設されました。

収容所は、明治12年の「北の大火」で、り災した方の応急住宅を使用し、畳を敷いてある和風の建物でした。

捕虜の暮らしは朝夕の点呼以外は自由な時間で、炊事も当番で行っていました。俘虜収容所を視察したアメリカ大使館書記官の報告書では「複数の調理場と提供される食事は最高です」と書かれています。ここに収容されていたドイツ兵は、収容所の統合とともに、大正６年２月18日に似島（にのしま）収容所へ移転しました。

神戸のバウムクーヘン製造で有名なカール・ユーハイム氏や、徳島の坂東俘虜収容所において日本で初めて「第九」演奏の指揮を行ったヘルマン・ハンゼン氏の最初の収容所も、大阪俘虜収容所でした。

現在収容所そのものは残っておりませんが、収容所があった西側にあたる平尾亥開（いびらき）公園内に「大阪俘虜収容所史跡碑」を設置しています。

１２　千本松大橋

千本松大橋は、周辺地域の発展と市中央部の交通混雑の緩和を目的に、木津川の最下流にあった千本松渡し(当時日々8,000 人近い人と二輪車を運んでいた)の位置に建設されました。

この橋は大正区南恩加島と西成区南津守を結ぶ長さ323.5m、有効幅員 9.75m(歩道幅員 2.25m)の大阪では初の「らせん橋」で、昭和 48 年 10 月に完成。橋の中央部の高さは 36m、水面からマストまでの高さ 34m の船なら、楽に通行できます。橋の両サイドに坂路高架がつけられ、大正区側は長さ452.4m、有効幅員 12.25m(歩道幅員 2.5m)となっています。

この橋の完成で、南大阪から大正区の工業地帯へ直接車の乗り入れができるようになり、これまでの市内経由の大回りが解消されました。

この橋に続いて臨港地帯には、港大橋(49 年)、平林大橋、かもめ大橋(51 年)などジャンボ橋群が形成されてきました。

１３　千本松渡船場

大正区南恩加島１丁目と西成区南津守二丁目を結んでいます（岸壁間 230m）。このあたりは木津川の川尻に近く、江戸時代には諸国廻船の出入りの激しいところでした。幕府は、舟運の安全のため水深を確保し、また防波堤のとしても役立つよう、天保３年（1832 年）ここに大規模な石の堤を築き、千本松の名は、この堤防の上に植えられた松並木に由来しています。

昭和 48 年に千本松大橋が完成し、それとともに渡し船は廃止されることになっていましたが、地元住民の強い要望によって存続することになり、現在も通勤通学の貴重な足として利用されています。１日 41 往復、平均利用者数は１日 1300 人。

１４　新木津川大橋

橋長：495m　幅員：11.25m　形式：鋼アーチ

完成：H6 年

木津川の最下流部を渡り、住之江区柴谷と大正区船町を結ぶ総延長 2.4ｋｍにもなる長大橋です。大阪の臨港地区は自動車交通の需要は高いが、大きな船が通るため橋を架けるのが難しい。ここでも高さ 46m、幅 150mの航路を確保する必要があり、かつ川の中での工事が難しいこともあって川を一跨ぎするアーチ橋が適しており、また地盤が軟弱であることから、橋脚に水平力が極力発生しないようにバランスド・アーチが採用されました。中央のスパン 305mは日本最長のアーチ橋です。

最高点は水面上 50mにもなるため、取り付け道路が長くなっています。北側の取り付け道路は、用地の制約から 3 重のループ構造になっています。

１５　旧木津川飛行場

木津川飛行場（大阪飛行場とも言う）は、当時の日本航空株式会社（大正１２年４月設立、昭和４年３月３日解散）が木津川尻埋立て地に水上機による定期航空のために開設されました。現在は中山製鋼所となっています。

水上機の運行は大正 12 年７月にはじまり〔大阪ー別府〕間の定期航空や〔大阪ー京城（現：ソウル）ー大連〕間の国際定期郵便飛行が行われました。　昭和４年４月からは日本航空輸送が営業を開始し〔東京ー大阪〕間〔大阪ー福岡〕間に毎週 12 往復、〔福岡ー京城〕間〔京城ー大連〕間に毎週６往復の定期航路を開設し、昭和 13 年には年間発着回数 8800 回、年間旅客１万人を数え、当時のレコードとなりました。　昭和 14 年、発着数がキャパシティを越えたため、陸上機能を大阪第二飛行場に移転しました。（水上機能はしばらく残りました。）

昭和 14 年１月には、大阪国際飛行場（現：伊丹空港）が開場し、木津川は水上機専用の発着場となった。

※移転の事情には、中山製鋼所の煙突が離着陸時に邪魔であるということ、地盤が弱すぎること、雨天時に視界が悪すぎることなどの説もあります。

※スチュワーデスの元祖は、当初はエアガールと言い、着物を着ていました。木津川飛行場発の高松行が第一号です。

１６　木津川渡船場

大正区船町１丁目と住之江区平林北１丁目を結ぶ（岸壁間238メートル）唯一の港湾局管理の渡船です。（ここ以外は全て建設局管理の渡船。）昭和30年12月からカーフェリー（「松丸」134トン）が運航していました。乗用車から大型トラックまで運搬し得る能力を持っていましたが、上流部に千本松大橋が開通した昭和48年の翌年からカーフェリーは廃止され、人と自転車のみを運ぶ渡船となりました。利用者のほとんどは大正区の工場に通う人や住之江区の木材関係で働く人です。水がきれいになったためか、渡り鳥が飛来し、毎年10月から翌年４月にかけて魚をとる姿が見られるといいます。１日40往復、平均利用者数は１日約200人。

１７　鶴浜埋立地

鶴浜地区の埋立工事は、昭和 60 年に着手し、平成 13 年に埋立造成が竣工。大正区中西部の鶴浜沖埋立地及びその背後地（鶴町 2･3 丁目）をあわせた面積が約 40ha、この地区を含む大正区南部は、大阪港に面し、隣接区となみはや大橋、千本松大橋、新木津川大橋などの橋梁でつながっています。

「大阪市総合計画」（平成 17 年 12 月）では、在来臨海部について、「新しいにぎわい空間の創出」、「快適な居住空間の形成」、「海や港の魅力を身近に感じられる空間形成」を進めることにしています。こうした考え方を踏まえ、鶴浜地区の開発が大正区及び近隣区の活性化につながるよう、この「鶴浜地区のまちづくり計画」（素案）を作成しました。

１８　ＩＫＥＡ(H20年８月１日開業)

世界36カ国で270店以上を展開する大型家具店「ＩＫＥＡ（イケア)」の国内４店目、関西で２店目になる「ＩＫＥＡ鶴浜」が20年８月１日、大正区にオープンした。初日開店時の午前９時30分には約300人が並び、１番目の客になった女性は「午前４時に来た」そうです。開業の８月の来客者数は74万人、現在でも週末は２万人～3万人が訪れます。

同店が建てられたのは、市が開発を進める埋め立て地「鶴浜地区」（約40ヘクタール）で、商業ゾーン（約10ヘクタール）では初出店。約40,000㎡の店内に、家具やインテリア、食器など約１万点が揃っているそうです。

１９　なみはや大橋

15 年の歳月をかけて平成７年完成した、鶴町と港区海岸通を結ぶ全長 1740 メートルで、大阪市で２番目の有料橋。流線形を描いた長大橋で、往復 2 車線。中央部では、水面から高さ 45 メートル、幅 100 メートルの航路を確保した設計です。

20　千歳橋

平成 15 年 4 月完成。大正内港の鶴町と北恩加島に架かる橋。大正区内の環状道路を形成して地域交通を円滑化するとともに、大正通りの交通混雑を緩和するものです。橋長 365m、車道幅員 7.0 以上、歩道幅員 3.0m で緊急時には、広域非難場所への避難路としての役割も担っています。主橋梁部はアーチ橋とトラス橋が融合する 2 径間連続の「ブレースド・リブアーチ橋」橋長 365m。

鮮やかなブルーを基調とした千歳橋は近隣の赤の港大橋、ライトブルーのなみはや大橋と並んで景観にも配慮したシンボル性の高いもので、大正区の新しいランドマークとなっています。

21　貯木場

大阪市内の材木市場は、江戸時代から始まり、立売堀川、西長堀川、境川運河へと移動しました。大正 7 年に大正区に移転し、木材街を形成した。昭和 7,8 年の最盛期には業者数が 500 件を越え、西日本はもとより旧満州、朝鮮に商圏を広げ、小林町を中心に豪商が軒を並べていました。

第二次世界大戦を経て、戦災と高潮災害により大正区は壊滅的な被害を受けました。その復興のため立案された大正地区復興土地区画整理事業と大阪港復興計画により、大正区は内国貿易港区として整備されることになり、明治 39 年から昭和 7 年までに埋め立てられた約 200ha の平林地区は、戦後、その一部が野菜畑として利用されていただけで、土地の有効利用が望まれていたため、平林地区を近代的な貯木場として整備し、大正区内の貯木池、製材･合板工場、木材市場を平林地区に移転させることになりました。

平林地区の全池の総面積は 694,939 ㎡に及び、かつての野菜畑は、南洋材や米材が浮かぶ木材工業団地に生まれ変わったが、後には、原木よりも製品輸入の比率が高くなり、今では、貯木場の水面を輸入原木が埋め尽くす光景は見られなくなっています。

22　朝鮮通信使

【朝鮮通信使の起こり】

朝鮮通信使のそもそもの趣旨は、室町将軍からの使者と国書に対する返礼であり、1375 年(元和元年)に第 3 代将軍足利義満によって派遣された日本国王使に対して信（よしみ）を通わす使者として派遣されたのが始まり。室町政権下では、3 度の来日があり、日朝関係は友好の中に進められていました。

しかし、室町幕府が滅亡し、織田信長により戦国時代に終止符が打たれ、豊臣秀吉が天下を統一後、1590 年(天正 18 年)と 1596 年(慶長元年)の 2 回の通信使の来日があるが、秀吉は 1 回目に朝鮮通信使が持参した国書の意味を朝鮮国王から服従するよう求められていると錯覚し、1592 年に突然兵を朝鮮半島に送り込み、秀吉が亡くなる 1598 年までに 2 度に渡り朝鮮出兵を行った。「文禄・慶長の役」です。

【江戸時代】

朝鮮通信使は室町時代から来日しているが、一般的には、朝鮮通信使といえば狭義の意味の江戸時代の通信使を指すことが多いようです。

秀吉の死後、天下人となった徳川家康は、中国や朝鮮との国交回復のため熱心でした。家康は、関が原の合戦から 4 年

後の1604年に、朝鮮から松雲大師らの僧の一行と２代目将軍秀忠と京都で会見し、和解のための話し合いを行いました。

そしてついに、第１回目の朝鮮通信使が1607年(慶長12年)に来日、以降、1811年(文化８年)までの200年間、12回にわたり主に徳川将軍の襲職(代替わりや世継ぎの誕生)祝賀のため来日し、国書の交換などを行いました。

幕府は、これらの朝鮮通信使を将軍の権威の誇示に利用し、各藩に多大な負担をかけることで、参勤交代と同様の効果を期待したのです。

幕府と朝鮮との仲介並びに朝鮮通信使の警護は、朝鮮貿易を命綱とする対馬藩が往路・復路とも担い、行く先々での対応は各大名が担っていました。

【航路】

朝鮮通信使の一行は、韓国の漢城(ソウル)を出発し、釜山から船で対馬に渡り、壱岐・九州北部・瀬戸内海を経て、大阪に到着します。

大阪では当初は「伝法口」を利用していましたが、後半は「木津川口」を利用するようになり、特に「尻無川河口」に大船を停泊させ、各藩が建造用意した金箔が施された豪華な川御座舟（かわござふね）に乗り換え、淀川を上り京の淀で上陸し、陸路で京都へ向いました。そこから、江戸幕府のある江

戸まで陸路、中山道・朝鮮人街道(京都から大津を経て琵琶湖沿いの浜街道を北上する街道)・美濃路・東海道を経て向かったのです。往復に費やした日数は200日にも及んだそうです。

● 大正区三軒家には幕府の川御座船・官船を収納するための「御船蔵（おふなぐら)」がありました。

【大阪での特徴】

大阪で宿泊の際は、現在の大正区界隈で川船に乗り換え後に、北浜の現在の「花外楼」のあたりで下り、そこから堺筋を下り宿舎の津村別院(北御堂)に向かいました。一行の人数は、毎回300名から500名の大使節団で、迎える側も礼を尽くし最大限の接待を行ったそうです。

また、迎える見物人の数も相当なもので、特に大阪での見物人は衣装もきらびやかで、他の地方の何倍もの数であったと当時の資料に残っています。

宿舎には、学問や風雅の志を志す人が通信士一行との面会を求めて押しかけ、宿舎での会話は筆談で行われたそうです。

【各地に残る朝鮮通信使の遺跡・祭り等】

大正区を流れる「尻無川」は、往時は「唐人澪（とうじんみお）」とも呼ばれ、朝鮮通信使の通る水路となっていました。

朝鮮通信使を模したもので、今日にも伝わる著名なものとして、三重県鈴鹿市と津市、岡山県瀬戸内市、岐阜県大垣市に残る唐人踊りがある。ほか、名古屋祭りでの「唐子車」・通信使行列などが残っています。

その他、日本各所に朝鮮通信使来日の際に筆写された行列絵巻が残っているほか、歌舞伎・浄瑠璃の文芸作品に朝鮮通信使を題材に扱ったものが存在します。1764 年に朝鮮通信使来日の際、警護に当たっている対馬藩の家臣に対する通信使による乱暴狼藉が元で、この家臣が通信使の通訳を大阪で殺害した事件を題材にしたものが、3 作つくられているそうです。

２３　甚兵衛渡船場

昔、尻無川の堤（つつみ）は紅葉の名所でした。「摂津名所図会大成」には甚兵衛渡し周辺のことが記された文章があり、（＊『大河の支流にして江之子じまの北より西南に流れて、寺島の西を入る 後世この河の両堤に黄櫨（はぜ）の木を数千株うえ列ねて実をとりて蝋（ろう）に製するの益とす　されば紅葉の時節にいたりては河の両岸一圓の紅にして川の面に映じて風景斜ならず 騒人墨客うちむれて風流をたのしみ酒宴に興じて常にあらざる賑ひなり 河下に甚兵衛の小屋とて茶店あり 年久しき茅屋にして世に名高し』とある。）それによると甚兵衛によって設けられた渡しにある茶店は「蛤（はまぐり）小屋」と呼ばれて名物の蜆（しじみ）、蛤（はまぐり）を賞味する人が絶えなかったといいます。

大正区側の「泉尾(いずお)」の町名は、元禄 15 年（1702 年）に開発された「泉尾新田」によりますが、その名称は開発者の北村六右衛門さんの出身地（和泉国（いずみのくに）踞尾(つくの)村）に由来しています。（現在の堺市西区津久野町です。）

現在も甚兵衛渡船場は健在で、大正区泉尾七丁目と港区福崎一丁目を結び（岸壁間 94 メートル）、朝のラッシュ時は２隻の船が運航しています。平成 17 年度の平均 1 日利用者は 1820 人。

２４　尻無川水門

・アーチ型ゲート（副水門スウィングゲート）

・ゲート重量　：530t（107ｔ）

・ゲートの大きさ　：幅 66.7m×高さ 11.9m（幅 17.1m

×高さ 11.55m）（※木津川水門と同じ）

・昭和 45 年 11 月完成

・試運転は月に 1～2回実施しています。

２５　三軒家西の御船蔵（おふなぐら）

三軒家地域は、豊臣時代から開発者の中村（木津）勘助の名前をとって、勘助島(かんすけじま)と呼ばれていました。江戸時代には「御船蔵」と「木津川口遠見番所(きづかわぐちとおみばんしょ)」が設けられ、御船蔵は岩崎橋公園附近（現在地)、番所は大正橋公園附近（現在地の東方）にありました。

「御船蔵」は幕府の官船等を納める施設で、文書や地図にも記録されています。当地の御船蔵が蔵した官船名は明らかではありませんが、幕府の「川御座船(かわござぶね)」には紀伊国丸(きのくにまる)や土佐丸(とさまる)等の名前が見られ、漆（うるし）塗りの屋形を持ち、金銅の金具をつけて豪華な装飾を施され、櫓(ろ)と棹(さお)で航行する川船でした。明治 23 年発行の大阪実測図にも跡地に「字船屋舗(あざふなやしき)」の文字が見えます。大正９年に開削された岩崎運河にも敷地の一部が取り込まれました。なお、公園北側の環状線の擁壁面には、「昭和３年の道路開通記念碑」が埋め込まれています。

26　尻無川

江戸時代、尻無川は今の大阪ドームの場所を通り、西区江之子島まで達していました。春弥生の潮干には蛤、蜆を取らんとしてくる人もおびただしや、摂津名所図会にも鯊釣り楽しむ人々が描かれている絵があります。また、この尻無川は、「唐人澪」とも呼ばれ，朝鮮通信使の通る水路にもなっており、幕府の御番所や御船蔵がありました。

27　大正内港

昭和22年6月に策定された「復興計画」により、内海化の方針が打ち出され、昭和22年から昭和31年に至る10ヵ年計画により大正内海化工事が進められた。大工事は、尻無川左岸一帯、千歳堀東岸および西岸の一部を拡幅、浚渫して約80万㎡（在来運河時期を含む計画水面積）の泊地を造成、新水際線に埠頭施設を建設し、主として内向貿易港区に整備した。これによって廃止される在来貯木地と木材関連工場を住吉区（現住之江区）平林町に建設する貯木場に移転した。内港化工事で発生する土砂は、在来埠頭区である鶴町、福町のほか、大正本土の臨港地区とその背後地の送って全面盛土をし、区画整理を行って地区全体を災害のない近代市街に整備するものであった。工事は、当初大阪港修築事業で進められたが、ジェーン台風（昭和25年9月）後、防災事業に切り替えられた。昭和38年度で防災事業、土地区画整理事業とともに国の補助が打ち切りとなったので、残りの工事は保留地処分金を財源とする港湾地区区画整理事業として続けられた。大正内港は鉄鋼や雑貨を扱う西日本の国内貿易基地として昭和41年から機能を開始し、平成16年度では、年間取扱高は125万トン、大正区全体の港湾施設では371万トンに達し、大阪港全体の内貿取扱高の6％余りを占めている。

２８　岩松橋

西区千代崎３丁目と大正区三軒家西１丁目の間の岩崎運河に架かるアーチ型式の鉄筋コンクリート製桁橋（大正 11 年７月架橋…架けられた当時の幅員は14.55m（歩道幅員1,5m）拡幅により橋長 66.5m有効幅員 35m）

平成 21 年 12 月、舟運観光の一環として、当時大正北中学校 3 年生の三木葉月さんの揮毫による横９０cm 縦３０㎝文字の大きさ２０㎝四方で重さ４０ｋｇのブロンズ製の橋名板が設置されました。

２９　GM工場の跡

木津川運河の北、鶴町１丁目船町渡船場北側に大阪に設立された日本ゼネラルモーターズの工場がありました。月産2000台、シボレー、ビュイック、ポンティアック、おーるずモービル、オペルなど、1941年まで15万台が組み立てられました。第二次大戦により操業は停止されました。ちなみに株式会社クボタも草創期には大正区で自動車を製造していました。昭和６年には「クボタ・ダットサン」が販売されています。